

② 土偶形容器と中屋敷遺跡



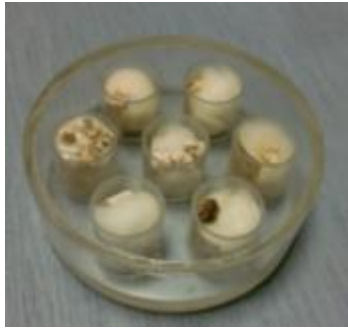
国指定重要文化財 土偶形容器
昭和36年2月17日指定

中屋敷遺跡は、弥生時代の遺跡です。

ここが遺跡であることがわかったのは、昭和9（1934）年のことで、道路を広げる工事のために畑を掘削したところ、地表下1m25cmのところから、完全な形の土偶がうつぶせの状態で見つかりました。

土偶は足を省略した安定のよい座像形で、頭部から体内が空洞に作られ、発見された時は、体の中に幼児の骨の破片や歯が納められていました。

この土偶は、容器的な形態をとっているのどくがたようきで土偶形容器と呼んでいます。



土偶形容器内に納められていた幼児の骨の破片や歯



22号土坑出土炭化米

発見された炭化米
資料提供 昭和女子大学

大井町生涯学習センター2階資料展示室で土偶形容器のレプリカを展示しています。

土偶形容器の特徴は、高さ26・7cm、横幅13・7cm、体の厚みは8・7cmで、ほぼ全体が赤く彩られていたようです。また、乳房や正中線（妊娠時、腹に現れる縦方向の線）らしき表現があることから、女性像と考えられます。体の中に幼児の骨の破片や歯が納められていたことから、再葬※に関わる資料として注目され、昭和36年に国の重要文化財に指定されました。

※再葬：一度埋葬した遺体を白骨化してから掘り出して埋葬しなおすこと

中屋敷遺跡

1999年から10年間に、昭和女子大学により中屋敷遺跡の調査が行われました。その結果、土坑※の中の炭化物を含んだ土の中に、約2500年前（弥生時代前期）の炭化したイネ、アワ、キビなどの穀物が含まれていることがわかり、注目されました。また、イネなどの穀物と一緒に縄文時代の人々の伝統的な食材であるトチノキも見つかったことから、中屋敷遺跡は、縄文時代から弥生時代へと移行変わる時期の人々の食生活を知るうえでとても重要な手がかりとなっています。

※土坑：古代の人が掘った穴の総称

